

令和6年度研究推進計画

学校名 下黒瀬小学校

学校長名 若狭 弘子

1 研究主題，研究内容・方法について

① 研究主題

「わかる」楽しさ「できる」喜びを実感し、学び続ける児童の育成

～算数科における付ける力に応じた手立ての工夫を通して～

② 主題設定の理由

本校では、昨年度より児童に育成すべき資質・能力である「好奇心・探求心」「人間関係形成力」「実行力」を算数科の授業で身に付けていくためには、どのような手立てを講じればよいかということを考え、実践していくことで、児童が「わかった」「できた」と感じ、学び続けていくことができるだろうと考え、研究を推進してきた。

その研究から、大きく2点の成果が挙げられた。1点目は、「わかった」「できた」という思いをもち、学び続ける児童の育成のために、問題提示の工夫が有効であったことである。この工夫は、育成したい資質・能力の「好奇心・探求心」を育成することにもつながっている。問題提示の仕方を工夫することで、児童の様々なつぶやきを引き出すことができた。また、児童は自ずとその時間に必要な「数学的な見方・考え方」を働かせて問題を捉えたり、解決しようとしたりしていた。2点目は、児童の困り感を表現できる場の設定が有効であったことである。問題に出合った時や課題解決中など、できた児童や分かった児童から話を聴くのではなく、「わからない」「困っている」「ここが難しい」などの児童の困り感を表現させ、その困り感から授業を進めていくことで、児童が常に問題意識をもって考え続け、全員で解決していこうとする姿勢を生むことができた。これは、人間関係形成力の育成につながった。

一方で大きく課題も見られる。算数科における付ける力の定着に課題が見られることである。単元末テストの結果、令和5年12月の時点で、低学年が87.4点、高学年が80.5点であった。低学年は、目標とする得点を上回っているが、高学年は到達できなかった。また、12月に行った標準学力調査の結果、標準スコアが49.8ポイントで、令和4年度の結果、50.3ポイントを0.5ポイント下回った。正答率40%以下の児童も令和4年度の結果では、7%であったが、令和5年度では、10%に増加している。特に、「思考力・判断力・表現力」を問う問題に課題が見られる。原因として、2点が挙げられる。1点目は、単元の構成における課題である。児童のつぶやきや疑問を大切にして授業づくりを行うために、教師側がその単元で付けるべき力を明確にすること（どのような数学的な見方・考え方を働かせて課題を解決していくのか、さらに、その学習を通して、更に豊かなものとなる数学的な見方・考え方はどういったものなのかを整理すること）が不十分であったと考えられる。2点目は、力が付いた児童の具体的な姿が明確でなかったことである。本時のねらいを「～説明できる」とするならば、どのような算

数用語を用いて、どのように説明できれば目標が達成できるのかを児童の言葉で考えておかなければならない。そして、その説明を教師側が伝えるのではなく、児童が語る場面を設け、児童が試行錯誤しながら習得していけるような対話のさせ方や全体での課題解決の場面を仕組んでいく必要がある。さらに、その児童の実際の姿からさらなる分析を行い、定着のための次の一手を考えていく授業改善の視点を持ち続けることが必要である。

そこで、児童が「わかる」楽しさと「できる」喜びを実感し、学び続けることができるようにするために、

- ① 算数科における付ける力の確実な習得のための分かる授業を目指して、単元をデザインすること
- ② 本校で身に付けさせたい3つの資質・能力「好奇心・探求心」「人間関係形成力」「実行力」をふまえて、算数科における付ける力の習得のためにどのような手立てを講じればよいかということ

この2点を考えていく。

1つ目の単元のデザインとは、児童の実態を適切に把握した上で、教材分析を行うこと、その単元で付ける力を明確にし、その力を付けていくために働かせる数学的な見方・考え方を整理するということである。

2つ目の手立てについては、付ける力に応じて、問題提示の工夫・対話のさせ方の工夫・振り返りの工夫の3点に絞って、具体的にどのような手立てが有効であるかを検証する。

こうしたことから、本研究主題を「わかる」楽しさ「できる」喜びを実感し、学び続ける児童の育成とし、副題を、～算数科における付ける力に応じた手立ての工夫を通して～とした。

③ 研究仮説

算数科において明確にした付ける力に応じて、問題提示の工夫・対話のさせ方の工夫・振り返りの工夫を行えば、児童が「わかる」楽しさ「できる」喜びを実感して学び続けることができるであろう。

④ 研究内容と方法

ア 研究内容

- ・算数科において付ける力を明確にして分かる授業を目指すための単元のデザイン
- ・児童が学びを実感するための手立て（問題提示の工夫・対話のさせ方の工夫・振り返りの工夫）

イ 研究方法

- ・講師や文献による理論研修
- ・基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させる取組についての研修
- ・全国学力テストの分析
- ・研究授業による実践
- ・標準学力調査の分析
- ・児童・教職員による振り返りやアンケート調査の実施と分析

⑤ 研究体制

- ・教職員は年間に学年で一回授業提案を行うことを通して、「できた」「わかった」を実感できるよう授業改善を図る。
- ・研究授業の前には、模擬授業の形式で指導案検討を行うことで、教職員が協働して授業づくりを行う。
- ・授業観察は、焦点化児童を決めてその児童の姿を観察し、協議会ではその児童の姿から検証を行う。
- ・授業提案後、代表授業をしていないクラスは、協議会で出た意見をもとに改善授業を行う。また、提案授業をしたクラスでも、協議会で出た意見をもとに、その後の授業で授業改善を行い、児童の様子を観察し記録に残す。

2 検証計画

① 検証の方法

児童，教職員によるアンケート，単元末テストの結果

② 検証の視点，方法及び指標

検証の視点	方法	指標
児童は、「わかる」楽しさ「できる」喜びを実感しているか。	教職員による授業振り返りシート	肯定的回答が85%以上
	児童による意識調査アンケート	
児童は、学び続けることができているか。	教職員による授業振り返りシート	肯定的回答が85%以上
	児童による意識調査アンケート	肯定的回答が85%以上
算数科における付ける力の確実な習得がなされたか。	単元末テスト	全学年 平均正答率85%以上

3 校内研修計画

4月，5月	理論研修 基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させる学びの土台づくりの研修
6月，7月	教材研究についての研修 研究授業
8月	全国学力テスト分析
9～12月	学びの土台づくりの取り組みについての中間振り返り
12月	研究授業
1～3月	振り返り，授業改善，研究紀要作成 まとめ（本年度研究のまとめ，次年度への方向性）

学校教育目標
かしこく やさしく たくましく～社会に出て通じる力の育成～

めざす子ども像
進んで学び合う・自分も人も大切にする・何事も最後まで粘り強くやり抜く子

研究主題
「わかる」楽しさ「できる」喜びを実感し、学び続ける児童の育成
～算数科における付ける力に応じた手立ての工夫を通して～

